



船橋校舎 14号館 2004年竣工  
物質応用化学科では、オープンキャンパス、学術講演会などで使用。



先端材料科学センター 1995年竣工  
高分解能透過型電子顕微鏡を保有。ハイテクリサーチセンターの原子テクノロジー分野での研究で使用。

船橋日大前駅 東口  
2004年 開設  
これにより、坪井地区の交通の便が向上した。



マイクロ機能デバイス研究センター  
2005年 竣工  
マイクロ機械/知能エレクトロニクス集積化技術の総合研究施設。  
クラス 1000 のクリーンルームをもつ。

# 工 化 時 報

第22号



## 物質応用化学科新主任あいさつ

着任にあたって

— 社会に開かれた活力ある  
物質応用化学科たれ！



澤口 孝志

(昭和51年修士課程修了)

任期: H17. 10. 1 ~ 19. 9. 30

sawaguti@chem.cst.nihon-u.ac.jp

- 情報共有して、明るく提案，元気でしなやかに実行！
- よい環境でよい教育とよい研究とよい評価を生む持続可能なグリーンシステムを！
- 強い個と軽いフットワークで活力ある学科を永遠に！

大学は氷河期を迎えている。その背景には少子化現象と逆行した昨今の4年制大学数の急増がある。2007年には進学希望者と入学定員がほぼ等しい全入時代に突入すると予測されている。既に、現在私立大学の29%が定員割れを起こしており、21世紀は大学淘汰の世紀と言われる所以である。加えて、少子化による競争力の低下やゆとり教育の弊害も相まって学生と大学の学力低下が避けられず、大学の研究・教育のレベル維持・向上には抜本的な構造・行政改革，教育体系の見直しが求められている。大学紛争改革から30数年，大学特区から自由経済市場での勝ち残りを賭けた，いよいよ大学維新時代の到来である。

我が学科は2008年4月に創設満70年の節目を迎えるが，少子化による学力低下やグローバル化による化学工業界再編の時代に，いまなお高度成長期の学科定員200名をそのまま維持している。さらに，在学生の成績がバイモダルな分布を示してから久しいが，それでもなお，付加価値をより高めて社会に役立つグリーン度の高い卒業生を輩出する義務が我々にはある。物質応用化学科の未来はいかに？

90年代よりグローバリゼーションの流れに呼応して科学

技術立国による日本再生が叫ばれ、大学の在り方が問われるようになった。知の創造（研究）と知の継承（教育）を使命とした旧来の象牙の塔からの脱皮による第3の使命として知の発信（社会貢献）が時代の潮流となり、知の結集（集団）が強く求められている。21世紀は「大学の社会化」がキーワードである。社会に開かれた活力ある大学（学科）の構築、つまり産（民）官学連携こそ、旗印であろう。

このような状況（ピンチ）を真摯に受け止め、最大で最後のチャンスと捉えるべきである。いかに発展させ得るのか？ 発想転換が必要である。しかし、特効薬はない。やはりオリジナティの高い良質な研究と教育の発信こそが最短で最善策であると信じる。今こそ、本音で議論を重ね、将来を見据えた大胆且つ着実な構造改革（環境適応能力に富む小さな組織づくり）に着手する時であり、強い個（教員）と集団（学科）の再生に向けた教育研究環境を整備し、飛躍への第一歩を踏み出さなければならない。

具体的には、まず、限られた人材の研究・教育時間を確保し、軽いフットワークで有効な活動が可能な環境を整えることである。そのために、情報の公開、公明な議論、公正な判断ができる明るく自由な空間を提供することが、私の最大の役目であると心得ている。着任に当たって、教職員に所信を配信し集約・実行可能な事案から順次提案実行している。

既に、2号館2Fの「主任室」、 「就職事務室」および「コピー室」は、それぞれ「教室事務室」、 「進路指導室」および「学生談話室」に名称変更され、学生・教職員はもとより卒業生も気軽に利用し情報交換できる明るい「MAC サロン」風にリニューアルされた。また、全入2007年、その年度は、我が学科が正に70周年を迎える記念の数え年である。在学生と卒業生と教職員の英知を結集させるための意気軒昂な70周年記念事業の開催を願って準備委員会を立ち上げた。

いずれにしても、在学生・卒業生・教職員、そして学科の永続的な発展のためには、スピーディーな改革が最大テーマであるとの認識に変わりはない。平成の目安箱であるメールにて気軽にご質問ご意見、アイデア等を是非お寄せ頂きたい。社会に開かれたフットワークの軽い活力ある新生学科づくりに、何卒ご理解とご協力を！

## 日本大学理工学部一日体験化学教室

2005 年度 実行 WG 委員長 清水 繁

平成 17 年 7 月 16 日(土)に平成 17 年度の「一日体験化学教室」が開催されました。短期大学部応用化学科との共催で行っているこの会も 5 回目となりました。毎年、日本化学会、高分子学会、化学工学会のご後援を賜り開催させていただいております。各学会の「夢・化学 21」という事業の化学のおもしろさを体験してもらい啓蒙活動の一環です。昨今、理科離れが話題にあがること多いことはご存じのことと思いますが、実体験を通じて化学のおもしろさを知ってもらい理科に興味をもってもらおうという趣旨に当学科も賛同し参加させていただいております。

本年度は、募集人数 100 名のところ、これまでで最多の 140 名の参加者に恵まれ、いかに化学への関心が高いことが伺われます。毎年、参加者は午前・午後に各 1 テーマずつの実験を行い、文字通り一日中化学づけになってもらっています。テーマ内容は大学レベルですが、一日とはいえ化学の専門家になったかのように感じてもらえるよう工夫しております。参加者(ほとんどが高校生ですが、毎年数名高校の先生の参加があります)に聞いてみますと、学校ではほとんど実験をしたことがないので楽しかったといただいておりますので、主催者としては目的はほぼ達成できたものと考えております。

このような行事を地道に行うことで、理科とくに化学への興味をもつ生徒さんを増やし、さらに当学科の広報活動を行って参加者の中から翌年 4 月、当学科の学生として再会できる生徒が増えることを願って止みません。

2006 年度 実行 WG 委員長 平野 勝巳

高校生に対する先端化学の啓蒙と当学科の PR を目的とした「一日体験化学教室」では、各研究室、短大応用化学科、理工学研究分析センターが行っている先端研究を高校生が理解できるように簡略化した実験を、無料で提供する昼食を挟んで午前と午後の 2 回体験させています。その結果、毎年参加者の数名が当学科に入学する実績が得られています。その一方で、近年はこれを単位科目として参加を義務付ける高校が現れ、修了証受領のみを目的とする参加者が一定割合を占めるようになりました。また、昨今の社会情勢から学協会の補助金が減少傾向にあり、本年度は学部から追加補助を受ける事態に陥りました。これらの問題は、同様の行事を開催している他大学でも起きているようです。

今や競争環境にさらされた大学が生き残りをかけて優秀な受験生を集めることは必須であり、「一日体験化学教室」や「オープンキャンパス」などの高校生向け行事がそのための有効な宣伝手段であることは論を待ちません。2006 年度は、本来の目的に立ち返ってこれらの行事の実施方法を統合的に再検討し、系統的に継続する必要があると考えています。早速新たなワーキンググループを組織し、問題点の抽出と具体的対策の策定を急ぐ予定です。工化会には上記状況をご高察の上今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 大学入試の昨今

入試実行委員 森田孝節

大学全入が叫ばれてから久しいが現在の本学の入試状況について述べたいと思う。

現在、理工学部の入試スケジュールとしては10月下旬に実施されるAO入試を皮切りに11月中旬の公募制高校長推薦入試、指定校推薦入試、1月中旬の大学入試センター試験を利用した試験(C方式第1期)、2月11日の一般入学試験(A方式)、3月上旬の大学入試センター併用した試験(CA方式)、3月中旬のC方式第2期と付属高等学校等推薦入試(A方式(12月中旬)、B方式(11月中旬))の他、帰国生入試、外国人留学生入試(第1期、第2期)、学士・準学士(推薦、一般)入試と多彩な入試状況である。それに加え、大学院入試が加わり、1年に亘って入試が実施されることとなる。その他に大学自体のPRのためのオープンキャンパス等の学校行事や大学入学後のミスマッチを防ぐために志望学科をよく理解してもらうことを目的としたエントリー期間(6月上旬～9月上旬)を設けている。各入試の詳細については学部パンフレットに挟み込まれている入試情報を参照していただきたい。さらに平成18年度入試からは校友子女入試がA方式と同日に実施される。A方式と異なる点はA方式では単願であるが校友は併願が可能となっている。

各試験別の物質応用化学科の入学募集定員数は推薦入試(公募、指定、付属)で95名、一般入試(A、C方式第1期、第2期、AO入試、CA方式)で105名、合計200名となっている。肝心の志願者数と合格者数を比べるとA、Bの付属校推薦入試では約30名前後の志願者ならびに合格者数であるのに対し、指定校推薦では平成16年度以前の30名前後の志願者があったものここ数年、10数名の志願者と減少傾向にある。平成13年度入試より実施されたAO入試では10数名～20名前後の志願者に対し、5名程度の合格者であり、約2倍の倍率となっている。公募制入試では平成16年度以前では20名前後の志願者があったものの近年では10数名程度であり、ここでも受験者数の減少が見られる。この現象はC方式、A方式においても同様の傾向があり、理工学部全体でも毎年約10数%の減少率となっている。当学科の数年の推移をみるとA方式も理工学部と同様の傾向がある。一方、C方式第1期ではここ数年、志願者が1,000名を超える年があれば800名前後の年もある状態が続いている。

翻って合格者が全員入学してくれるかといえばそうではないことは皆さんもご承知のとおりである。実際に入学する学生についての手続きは年々悪くなる傾向にある。この傾向に歯止めをかけるには卒業生が胸を張って受験生に推薦できる学部・学科でなければならず、また魅力ある学科であることを世間にアピールすることが必要であると考えられる。それには学科全体の取り組みが必要であろうし、受験生がどのような情報を欲し、判断しているかを考えねばならないと考える。その情報源として卒業生諸氏の叱咤激励や子をもつ親としての大学入試に対するご意見等を賜れば幸いである。

## 新カリキュラムの実施に向けて

理工学部次長（駿河台校舎担当） 真下 清

平成19年4月からの新カリキュラム(新カリ)実施に向けて、各学科が準備検討していましたが、平成17年10月1日から越智光昭学部長が新しく就任し、新執行部体制に移行しました。新カリの開始時期や内容について新執行部で多くの議論を重ねた結果、平成20年4月から実施することに決定しました。平成18年1月19日の教授会に学部長から報告されましたが、そこに至るまでの経緯について述べたいと思います。

大学全入時代が平成19年度から始まることは広くマスコミ等で報じられていますが、大学は学生数の確保の努力だけではなく、入学させた学生に対する質の保証に責任を負う時代にもなってきました。私達の理工学部も学生数確保の努力をしていますが、その一つの表れが入学試験の多様化にあります。現在、入学試験は各入学定員の大小はありますが、一般入学試験や各種推薦入試を含めて全部で12種類に渡っています。したがって新入生の学力がまちまちであることは容易に察せられるでしょう。世上良く言われているような学生の学力不足は当然存在しています。そこでその学力不足を1年生の内に少しでも解消しようと越智学部長の執行部は次の3項目を新カリで実施する計画を考えています。

1. 新入生教育（英語、数学、物理、化学）の導入による基礎学力の充実（1年次前期）
2. 専門基礎教育の充実
3. 情報技術（IT）教育と国際化に対応する英語教育の充実

この改革を具現化するために、従来の「学務委員会」の下における新カリの審議ではなく、新しく「教育改革推進委員会」を設置して、その委員長を特命教授とし、この委員会で新カリの内容について徹底的に議論してもらいます。新カリ作成までには一般教育と専門教育の教員間の十分な意思の疎通と協力が必要となるため、その準備期間を含めて実施時期を1年間先送りにしたのです。

物質応用化学科の新カリの内容はどんなものになるのか考えてみます。やはり時代に合った特色のある科目を設置しなくてはならないでしょう。JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定に耐えられるようなものでなければなりません。だからといって学科内の専任教員が教授できないような科目を多く設置することは経営上の問題を含めてうまくないでしょう。

新カリが本当に学生の基礎学力の向上につながるようにするためにはどう工夫すればいいのか、私達教員の正念場と思っています。

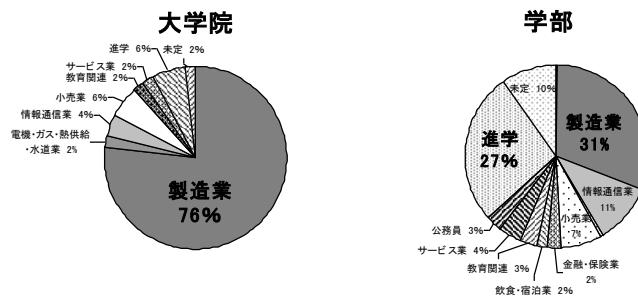
## 少子化に向けた就職への取り組み

応化就職指導委員会

景気が少し上向いてきておりますが、経済や産業構造の劇的変化、急激な少子高齢化の変化に対応できる柔軟な発想力と、新しいことに積極的にチャレンジできる優秀な学生を採用したいということには変りはなく、今なお就職戦線は厳しい時代といえます。理工学部では各種SPI適性模擬テスト、公務員講座、教職対策、女子の就職対策、合同企業セミナーなどを開催し、積極的に支援しております。現在、学生の就職活動で重要なのはインターネットによる情報収集および企業就職窓口への申込みに加えて、パソコンと携帯のメールおよび就職情報雑誌が威力を発揮しているようです。また、本学科・専攻では教授陣による応化就職指導委員会を設置し、全教授が就職指導の充実につとめております。たとえば、化学系就職求人情報の選別、求人での訪問される企業の面会、会社訪問などは直接教授が対応し、就職支援の強化に取り組んでいます。

就職状況は製造業に大学院生の約80%、学部では約30%となっており、学部生は化学系分野だけでなく多様な分野に就職しています。したがって、学生はきびしい就職難のなか十分健闘しているといえます。直接学科・専攻への求人企業は卒業生が活躍している会社も多く、実績もあり大事にしたいと思っておりますが、昔からすると学校求人情報への関心を示さない学生も多くなっています。平成18年度就職ガイダンスでは「就職活動をはじめにあって」と題して、ニスコム(株)人材紹介事業部長 川野辺晃生氏(卒業生)による講演会を開催し、学生の意識改革に取り組んでおります。

就職後3年以内の離職率が30%、フリーターおよびニート数の増加など学生の働く意欲や能力を高める自立支援、企業の求人活動の早期化による学生の就職活動期間の長期化も今後の課題であります。



### 主な就職先

【製造業】 アキレス、信越ポリマー、住友スリーエム、日産化学工業、横浜ゴム、品川白煉瓦、住友大阪セメント、コスモ石油、帝国石油、ニチアス、田中貴金属、エルナー、スタンレー電気、TDK、浜松ホトニクス、市川毛織、山崎製パン

【情報通信業】 ソフトバンク BB、富士通ビーエムシー、ヤマトシステム開発

【卸・小売業】 マックスファクター、スリーボンズ、大塚商会、昭和興産、巴商会

【教 育】 日本大学理工学部(副手)、高等学校教員

【公務員】 警視庁、神奈川県警察、埼玉県警察、藤沢市役所、さくら市役所

## シリーズ OBからの大学への提言

### たのしい授業をめざして

秦野市立東中学校教諭 那賀 恵美子(昭和61年卒業)



「俺たちって、バカなんでしょう？」  
2年ほど前の授業中、生徒に言われてびっくりしました。マスコミが学力テストの結果を過去の成績とくらべて報道したのを知ったようでした。

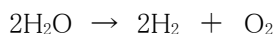
「たしかに、君たちは小学校のときに(授業時数が減って)ドリル(繰り返し練習)をあまりしていないかもしれない。

でも、勉強のコツを教えるし、家庭学習の仕方も伝授するからね。わからないことはいつでも聞きにおいで！」と答えました。

大人は子どもたちに、「元気に学校に行ってほしい」「賢くなしてほしい」と願っています。子どもたちは、できることが増えればうれしいし、授業の中で活躍することができれば自分や仲間の進歩を感じるでしょう。

そういった要望に応えるために、私が最も大切にしているのは「授業」です。そして、私は「たのしい授業」をめざしています。

例えば、水の電気分解を行うと「2:1」の割合で気体が発生します。原子・分子がイメージができれば、生徒は「2:1」になることをただ暗記するのではなく、自分で見つけることができます。



原子・分子のイメージづくりには、分子模型がとても有効です。そして、多くの生徒に「たのしかった」「わかった」「先生、ありがとう」と言ってもらえます。「よくわからないけどたのしかった」という感想には驚きです。

神奈川県は公立高校では学区制がなくなり、行きたい高校を自由に選べるようになりました。少子化の時代、公立中学校も「あの学校(あの先生)の授業が受けたいから入学する」という時代になるかもしれません。その時のために、1時間でも多く「たのしい授業」ができるよう授業の腕を磨いていきたいです。



## 日本大学習志野高等学校における受験人口減少に対する取り組み

日本大学習志野高等学校教諭 井上みどり(昭和59年修士修了)



日本大学の各付属高校では、15歳人口の減少に伴って受験生が減りひいては偏差値レベルの低下が起きています。私立の学校としては学校の存続にかかわる大きな問題となります。本校においては、カリキュラムの変更を平成18年入学生から行い、魅力ある高校を目指しています。

理工学部の併設高校として高大連携教育を実施しています。1年生対象理工学部教授講演、2年生対象理工学部施設見学、3年生対象理工学部学科説明会等が行われています。3年生は秋から理工学部の講義を聴講することができ、単位も認定されます。

カリキュラムは1年次は生徒各自の適性と能力を伸ばすため、基礎学力の充実をはかります。2年次からは、生徒の希望と適性に応じて文系・理系に分かれて、特色ある3つのコースがもうけられています。

### ・CST (College of Science and Technology 理工学部進学) コース

日本大学理工学部各学科への進学をめざします。高大連携の充実・発展をはかり理工学部の講座の一部の単位を認定(高校・大学ともに)します。

### ・NP (National and Public 国公立進学) コース

千葉大学を始めとする国公立大学への進学をめざします。コース在籍者全員が国公立大学へ合格を目指します。原則として1年次の成績が学年在籍者の半分以上とします。

### ・GA (Global and Advanced 総合進学) コース

日本大学、有名私立大学への進学をめざします。3年次では、それぞれのコースで徹底した進学指導が行われます。

### 大学進学

1. GA コース在籍者は、日本大学、他大学への推薦は認めます。

2. NP コースの在籍者は、国公立大学の推薦において他のコースに優先して選考対象とします。このコース在籍者が私立大学を希望する場合には原則として一般入試で受験する。

3. CST, NP コースは原則として生徒担任は持ち上がりとなります。

以上のように伝統と文化を守りつつも生徒の価値観と進路の多様化に対応するカリキュラムを目指しています。また、理工学部の併設校と進学校との2面性を生かした多様な進路選択を特徴として強く打ち出したいと思えます。

部活や学校行事に力をいれ知育・徳育・体育の調和のとれた人材を育成することを目標にしています。

## ハイテクリサーチセンター整備事業 (平成16~20年度)について

矢野 彰一郎

日本大学理工学部では、平成11年度から15年度まで、文部科学省のハイテクリサーチセンター整備事業を実施してきた。その中で物質応用化学科では、『バイオミメティックプロセスによる構造融合化材料の設計と創製』(研究代表者：矢野彰一郎)の研究を行ってきた。ここでは生体系に見られる機能、構造、組織、プロセス等を模倣し、新しい機能を有する材料をつくってきた。これらの成果をさらに深めるために、この整備事業のフォローアップとして平成16年度から5カ年計画で新たに『アトムテクノロジーを指向したナノ構造融合化材料の創製』(研究代表者：澤口孝志)の研究を立ち上げた(総予算1億3千万円)。ここではナノレベルでの構造制御を基盤とし、原子・分子1個、1個を自在に操作する「アトムテクノロジー」にまで踏み込んで新しいナノ材料を創製しようとするものである。物質応用化学科では、(1)貝殻などの生態系の形成過程や構造を模倣した力学特性に優れたナノ複合材料の研究、(2)環境低負荷型溶媒として注目されているCO<sub>2</sub>超臨界流体や金属アルコキシドのゾルーゲル法などを利用して有機高分子を無機成分と複合化したナノハイブリッドの調製に関する研究、(3)生物が持つ巧妙な自己組織化能力を模倣して、ポルフィリンなどの光・電子特性の優れた機能性分子を自己組織化により基板表面に原子・分子レベルで配列させた高機能性分子組織体の創製に関する研究、(4)通常の高分子のように、共有結合を介さずに複数の構成分子の輪が機械的に鎖状に結合したカテナンとよばれる全く新しいタイプの高分子の合成に関する研究、(5)生物資源を素材とし、抗発癌プロモーター活性や抗酸化活性など新機能を持つ物質の設計と合成の研究などを行っている。これらの研究は、科学的に重要であるばかりでなく、省資源、省エネルギー、地球環境保全の観点からも期待されている。

化粧品原料から製品まで 化粧品OEMメーカー

**東色ピグメント株式会社**

〒124-0012 東京都葛飾区立石6-37-14

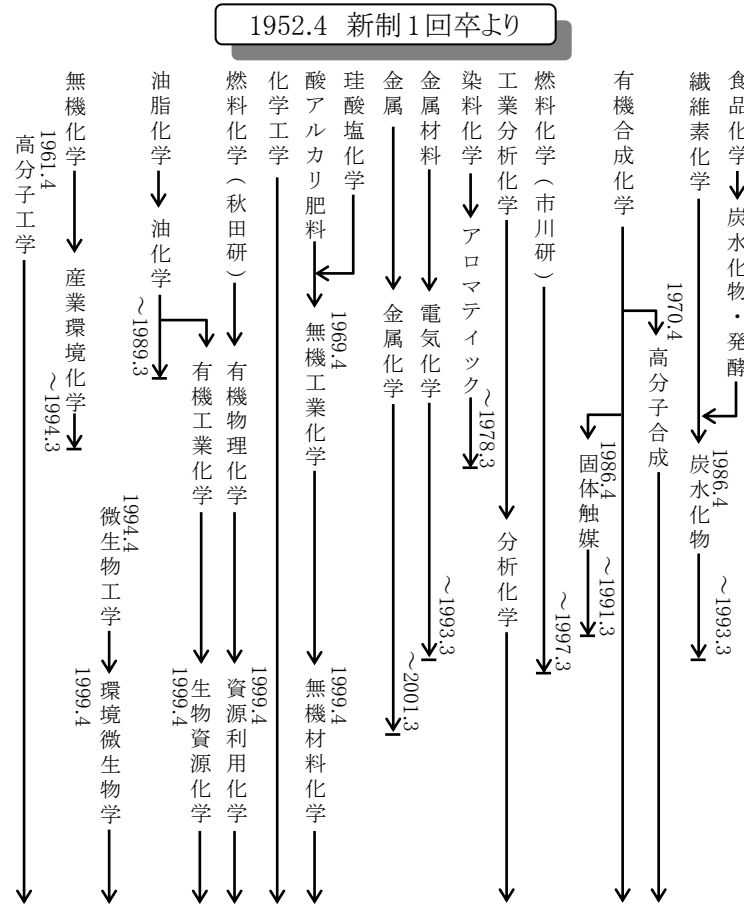
昭和58年卒 代表取締役社長 **嶋原靖宏**

TEL03(3693)1050 FAX03(3693)1053

## 学生編集委員のページ

### 「我が物質応用化学科の変遷」

時代のニーズに伴い、1999年に工業化学科から物質応用化学科へと生まれ変わりました。そのような中で、本学科は“環境・エネルギー・新素材・生体物質”という分野に取り組むため、新たな研究室が発足されるなど、日々成長し続けています。そこで今回、各研究室の成り立ちをまとめてみました。



静電容量型変位計・超音波リニアモータの輸入販売

Progress & Creativity

**ピー アンド シー株式会社**

〒150-0013 東京都渋谷区恵比須1丁目20番8号

(エビススバルビル5F)

電話 (03) 5793-1561 ファクシミリ (03) 5793-1562

昭和35年卒 代表取締役 安達 昭郎

**～現在の研究室紹介※～**

**化学工学研究室** (越智健二, 栃木勝己, 栗原清文, 松田弘幸)  
化学プロセスの設計・運転の基礎である各種物性に関する研究, 環境保全に貢献し得る分離精製システムやエネルギーサイクルシステムの最適化に関する研究などを中心に行っています。

**環境微生物学研究室** (長田洋子, 西村克史, 谷川 実)  
アミノ酸の生合成と分解のメカニズムやD-アミノ酸分解酵素と呼吸鎖との関係について研究をしています。

**高分子工学研究室** (栗田公夫, 清水 繁, 伊掛浩輝)  
高分子材料について工学的な視点からその物性を調べ, 材料の評価, 新規高分子材料の設計・開発を進めています。

**高分子合成研究室** (矢野彰一郎, 澤口孝志, 萩原俊紀)  
ケミカルリサイクルの開発, 付加価値の高い新機能性高分子材料の研究・開発やその物性評価及び新規高分子材料の原料開発についての研究等を行っています。

**資源利用化学研究室** (真下 清, 平野勝巳, 菅野元行)  
石炭や再生可能なバイオマス等の化学構造を解明し, 工業化が可能な高度エネルギー変換方法を研究することによって, エネルギー循環型社会の構築を目指しています。

**生物資源化学研究室** (秋久俊博, 深津 誠, 浮谷基彦)  
植物や微生物などの生物資源を原料素材とし, 新機能性分子の創製や生物及び酵素反応利用技術の開発などに関して研究しています。

**分析化学研究室** (磯崎昭徳, 櫻川昭雄, 森田孝節, 吉川賢治)  
迅速で簡易に分析するために機器を用いた新しい測定法の開発について研究を行っています。

**無機材料化学研究室** (安江 任, 小嶋芳行, 遠山岳史)  
カルシウム酸化物系生体材料, 蛍光体材料および産業廃棄物の再資源化, 二酸化炭素のリサイクルなどを重要研究課題としています。

**有機合成化学研究室** (滝戸俊夫, 大月 穰, 青山 忠)  
新しい反応の開発と興味深い機能を持つ有機化合物を選択的に合成する方法の開発および得られた化合物の特性を解析しています。

※ 他に外部(企業・官庁・他大学)との共同研究・開発を積極的に行っています。

## クラス会・同窓会の報告

### 高分子合成研究室卒業生の皆様 “平成18年度同友会開催のお知らせ”

高分子合成研究室は1972年に設立されてから2005年までにおよそ800名の卒業生を送り出しており、本年36期目の卒業研究生を迎えた。第4回目の総会は2005年11月26日(土)駿河台1号館カフェテリアにて新企画マリンバミニコンサートが加わって、およそ100名の参加を得、大盛況であった。

同日午後から総会が開催されるまでの時間を利用して企業と学生を繋げる就職説明会とOB池本俊一 昭和化成工業(株)社長の講演会を開催した。参加企業への内定は本研究室だけでなく他研の学生へも広がり着実に実績が上がっている。

このように本会は立ち上げ時に目標とした豊富な人材ネットワークを気軽に活用できるサロン風産学連携拠点として学内外から益々重要視されはじめている。

本会は、研究室の枠を超えたネットワークへの発展を強く願っている。興味ある方は研究室(矢野 yano:03-3259-0799; 澤口 sawaguti : -0819 ; 萩原 hagiwara : -0433 ; \*\*\*\*@chem.cst.nihon-u.ac.jp)にご一報を!第5回は2006年11月11日(土)日本大学理工学部1号館2階カフェテリアにて開催される。

(同友会役員 矢野彰一郎会長, 津野岳彦, 関口優紀及び澤口孝志副会長, 片桐正志幹事長, 嶋原靖宏および岡崎弥寿子会計, 中村信男及び新国禎倅監事)



## 昭和39年卒50名が同期会に集合

平成17年12月3日、山の上ホテル別館シェヌーに同期50人が集合。2001年から2年ごとに開催しているが、今回も卒業以来の再会もあって、賑やかに、愉快的な時を過ごした。先生方は和井内、市川、中沢諸先輩のご出席を頂けたが、先生方が高齢となり体調が思わしくないで欠席との通知を受け取るのはさびしい。会の終わりに「若きエンジニア」を歌って再会を約した。

幹事代表 山崎彰、矢野彰一郎

(今回も39年同期会より工化会へ寄付を頂きました。工化会事務局)

### 日本大学理工学部科学技術史料センター

2005年6月、船橋キャンパス5号館2階に図書館の附属組織として日本大学理工学部科学技術史料センター(CST MUSEUM)が開設されました。役割としては日本大学理工学部の諸先生方の残された遺産を収集・継承するとともに、理工学部の歴史と文化を目に見える形で継承・発展させることを目的としています。卒業生の方も利用可能ですので、興味のある方はぜひご覧ください。

開館時間：10:00～17:00

(休館日：日祭日)

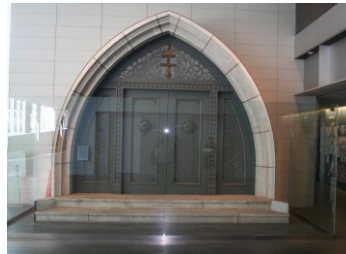
問合せ先：047-469-6372

(科学技術史料センター)

#### 史料群

**駿河台校舎保管史料**：駿河台校舎旧1号館正門玄関、駿河台校舎旧1号館装飾

**船橋キャンパス保管史料**：関東大震災の歴史的記録、軽飛行機N-58 Cygnet(模型)、フェロセメント・ヨット、海幸橋ヒンジ、ダウンウインド型風向風速計、潮流発電装置、NU-102風力発電装置 他



CST MUSEUM 所蔵  
駿河台校舎旧1号館正門玄関  
保存展示



CST MUSEUM 所蔵  
駿河台校舎旧1号館装飾  
保存展示

## 2号館に学び 2号館に勤めて



昭和36年卒 越智 健二(化学工学研究室)

不肖本年3月末をもって定年退職することになりました。思い起こせば、昭和32年本学工業化学科に入学し、一年間の三島教養部での生活を経て33年4月から駿河台へ移行しました。以来48年間2号館で過ごしたわけでありまして。2号館の、今はすっかり改装された1階と地階の実験室、33年頃は木目が目立った実験台の並ぶ、決して明るいとは言えない環境でした。講義室は2号館の22講堂(現在は進路指導室と分析化学研究室とに分かれています)、エアコンなしで夏も冬も学生服で学んだ当時が今は懐かしく思い出されます。当時は勉学の場の環境にはあまり気を留める者はいなかったように思います。みんな「学ぶ志」が高かったからでしょう。34年の暮れ頃だったと思いますが、卒業研究着手の配属先が化学工学研究室に決まって間もなく、小島和夫先生から突然大学に残ってはどうかのお誘いを頂いた時も、どう考えたらいいのか戸惑いましたが、自分の気持ちのどこかに「学ぶ志」があったのだろうと、今その頃の事を回想しております。昭和38年3月大学院修士課程を修了して4月から化学工学研究室のスタッフに加えていただいた次第です。以来小島先生の門下生として昭和51年には理工学部から特別研究員に準ずる処遇でカナダ・オタワ大学への1年間の出張の機会に恵まれ、学会関連では平成14年、15年度分離技術会会長を努めることができ、平成16年度には当学会の学会賞である「業績賞」をいただきました。これもひとえに小島先生のご指導ならびに研究室に学ばれた皆様のご協力の賜物と深く感謝しております。また、教室の先生方ならびに同窓の皆様から何かとご厚誼を賜り43年間の教員生活を2号館で過ごさせていただきました。紙面の都合で身勝手な拙稿で恐縮ですが、御礼傍御報告に代えさせていただきます。

### ポリオレフィン系コンパウンドの製造・販売

## 昭和化成工業株式会社

- |  |  |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 本社・工場 〒348 8585<br>埼玉県羽生市小松台1-603-29<br>TEL 0485-61-5221 FAX 0485-61-5229 | <input type="checkbox"/> 東京支店 〒101-0032<br>東京都千代田区岩本町3-3-2 アックス神田8F<br>TEL 03-5823-1301 FAX 03-5823-1304           |
| <input type="checkbox"/> 技術・試験<br>TEL 0485-61-5225 FAX 0485-61-5228                                | <input type="checkbox"/> 大阪支店 〒532-0011<br>大阪府大阪市淀川区西中島6-1-3 7th新大阪第2ビル10F<br>TEL 06-6307-2727 FAX 06-6307-2748    |
| 昭和53年卒<br>代表取締役社長 池本俊一   | <input type="checkbox"/> 名古屋営業所 〒450-0002<br>愛知県名古屋市中村区名駅3-15-1 名古屋9'4thビル2号館<br>TEL 052-581-2211 FAX 052-581-2385 |

### 産業廃棄物収集・運搬中間処理のスペシャリスト



株式会社 **三栄興業**

〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎3-302

60年卒 **鈴木義弘**

TEL 048-955-1632 E-mail : sanei-k@misato-net.com

ホームページ : <http://www.misato-net.com/3ak/>



## 平成17年度工化会事業報告

平成17年度工化会通常総会は、駿河台校舎1号館の2階中会議室において平成17年5月28日(土)午後4時10分より、役員・会員47名の出席を得て開催されました。議長には藤池誠治本会会長を選出し、庶務、会計、会員、会報の各委員会の平成16年度事業報告および会計報告、ならびに平成17年度事業計画および会計予算案の審議を行い、承認されました。なお、事業計画としては役員会、通常総会の開催、講演会の開催(理工学部校友会後援)、オープンキャンパス'05の後援、また今年度からは一日体験化学教室に5万円を後援することになりました。一日体験化学教室は化学離れといわれている高校生に実験を通して化学の楽しさを知ってもらおうと2000年から行っており、今年で6回目を迎え平成17年7月23日(土)に行われました。評判は上々であったと聞きました。また、昨年までは産学技術交流会に補助をだしていましたが、今年度は補助を行わないことになりました。総会の席上で今年度産学技術交流会は何故行わないのかとの質問があり、安江教授から交流会はこれまで4年間行ってきたおり、今年は見直しの年としたい旨、また秋久主任からは開催については今後さらに学科内で検討していく予定である旨、返答がありました。

人事としては櫻川教授が滝戸教授と交代して会員委員長となりました。また、本年度は理工学部校友会の役員の変更があり、工化会として平成17~19年度の常任幹事(12名)および副会長(1名)を推薦しました。副会長には藤池工化会会長を推薦しました。常任幹事も少し若返り、新たに櫻川教授、澤口教授、栃木教授、安江教授、斉藤政久氏、石山利男氏が常任幹事となりました。

総会終了後の恒例の懇親会は、1号館2階のカフェテリア(学食)において予定時間を30分ほど越えた午後5時30分から開催されました。懇親会は43名の出席を得て、秋久主任より学内の近況報告があり、続いて安達前校友会会長により乾杯の発声をいただいた後、和やかな雰囲気で行われ、午後7時30分に閉会となりました。

平成17年度から工化会の予算は特別会計予算と経常会計予算の2種類を作成しなければならず、栃木会計委員長は予算案を作成するのに大分ご苦労されたようでした。なお、経常会計とは準会員(学生会員)還付金を管理するための会計



です。平成17年度特別会計予算は719.6万円(内訳は前期繰越金506.4万円, 校友会割戻金92万円, 会費100万円, その他21.2万円), 平成17年度経常会計予算は172万円(内訳は前期繰越金136万円, 校友会補助金36万円), 一方特別会計予算の支出では庶務費64万円, 会報費59万円(工化時報印刷・郵送費), 会経費3万円を予定しています。また, 経常会計予算の支出では会運営費A(会員関係)39.1万円, 会運営費B(会報関係)28万円をみこんでいます。

平成17年度における会員諸氏による会費の納入状況(平成17年5月18日～平成17年10月17日)は, 納入者数345名, 納入金額は約79万円となっています。納入者の中には複数年度分の会費を納入された方や, 寄付をお寄せいただいた方も多数おられますが, 本号の会費納入者氏名一覧の掲載を持ってこれらの方々への御礼に換えさせていただきます。

個人情報保護法の制定にともない今後名簿の発行は困難になることが予想されており, 最終的にはどのような形態の名簿となるか会員委員会において検討中であり, 名簿を希望する会員にはその期の分に限り無料で配布することも可能であるとの報告がありました。

最後に平成17年度の工化会主催行事ならびに後援行事の概要を記載します。

- ① 平成17年5月7日(土)14:00～16:00 第1回役員会
- ② 5月28日(土)16:20～19:30 通常総会・懇親会
- ③ 7月16日(土)一日体験化学教室
- ④ 7月31日(日)オープンキャンパス'05(船橋校舎)
- ⑤ 平成18年1月16日(月)講演会

以上 庶務委員

本学名誉教授 奥谷忠雄先生におかれましては平成17年4月5日にご逝去されました。謹んで哀悼の意を表し, ご冥福をお祈り申し上げます。

本学元教授 板橋国夫先生におかれましては平成17年12月17日にご逝去されました。謹んで哀悼の意を表し, ご冥福をお祈り申し上げます。

### 会費納入者名簿 (平成18年2月16日現在)

<b>昭和16年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治	<b>昭和24年</b> 上野山高正 山下 登 渡邊 光夫 青池 嘉一 市川 二郎 入江 文郎 宇田 公德 小倉 契秀	<b>昭和29年</b> 德永 静 新谷 勤 平田 佳邦 福島 敏郎 堀 武 牧 宏 牧野 迪正 三田 郁夫 宮尾 利政 村上 全司 山口 猛 吉川 和夫 渡邊 靖	<b>昭和33年</b> 伊藤 道夫 工藤 富司 篠崎 清 渋谷 六郎 東海林 正 園田 勲 竹内 孟 竹原 晃 田中 保 田村 浩司 坪井 聰介 西田 金誉 野村 龜利 村松 勉 矢作 栄甫	<b>昭和36年</b> 神宮司 弘 関口 勝 高尾 俊行 高橋 健一 塚原 俊一 内藤 晴義 西嶋 泰世 野島秀次郎 原 幹夫 丸山 長資 宮本 實 村川 信子 山本 成也 米田 修一 渡邊 高章
<b>昭和17年</b> 小川 守三 佐藤 恒男 水田 彰 柳橋 栄	<b>昭和25年</b> 石田 宏 市川 安邦 尾高 陽一 黒須 朗雄 榊田 雄三 丹野 豁 古館 和夫 吉田 耕一	<b>昭和30年</b> 浅川 和昭 石井 喜悦 井上 秀雄 大内 蕃 尾崎 実 加藤浩一郎 瀧谷 俊雄 谷川 清 中嶋 貞夫 長山 勝政 奈良 富雄 村松 俊作 米田 虎雄 米山 廣保	<b>昭和34年</b> 五十嵐輝行 稲田欣一郎 大井 壽 加賀勘之助 柏崎 敏郎 熊谷 祐一 才木 義夫 齋藤 二郎 滝沢 幸二 永井 滋 中島真喜雄 富士田諄一郎 三浦 修 宮森 隆志 守屋伊佐雄	<b>昭和37年</b> 青木俊一郎 石井 四郎 石井 照明 宇賀治正名 小串 照宗 越智 健二 門井 守夫 飯戸 武 河内 宗弘 木佐貫秀彌 木村 繁夫 栗村 規雄 齊藤 博 崎下 昌道 佐藤 貞男 鈴木善治郎 砂川 憲二 炭田 幸宏 高柳 裕臣 中田 彰弘 中村 紀史 野村 友次 畔上 統雄 松本 規雄 横山 樹静
<b>昭和18年</b> 穴山 義正 大木 天材 加藤 泰正 金井 昇介 川上 利重 小林 和夫 平田 好顕 吉永 利男	<b>昭和26年</b> 稲垣 正 植村 治 太田 精一 加納 照彦 川西 正人 小島 和夫 清水 輝夫 鈴木 一成 鈴木 信夫 田中 幸穂 中野 博司 平田 達男	<b>昭和31年</b> 池田 忠良 笠間 三男 加藤 五郎 小林 國平 近藤練太郎 臼井 徹郎 寺島 賢治 古川 新一 松田 誠一	<b>昭和35年</b> 池田 実 伊東 明男 岩瀬 善則 牛込 力夫 栗原 孝夫 佐藤 忠 高橋 秀雄 田尻 勝紀 玉置 憲三 児玉 五男 藤森 信正 宮 道夫 茂出木久義 横倉 隆康 吉川 和男	<b>昭和38年</b> 伊地知龍清 井上 靖治 磯崎 昭徳 奥山 正之 梶山 秀矩 銀林 博 駒井 俊雄 広瀬 丈久 佐々木賢明 斎藤 一郎 小谷 嘉孝 庄司 翠 植木庄左衛門 杉崎 秀夫
<b>昭和19年</b> 浅野 良哉 神谷 洋 菅 秀夫 玉置 弥栄 筑紫 宗光 矢野 誠 脇 幹夫	<b>昭和27年</b> 市川 次良 入倉 芳郎 植松 貢 柏木 治彦 勝又 茂 木下真喜雄 坂田 吾朗 杉江 貞夫 高田 芳行 外山 研次 林 貞吉 日置 隆 宮川 継男 和井内 徹	<b>昭和32年</b> 飯沼 崇 川口 國夫 小池 久則 小松原 彬 高木 弦 田中 康博 田畑 調友 中 嘉久 廣橋 亮 村山 政敏 本山 方史 役重 典之 安田 信人 矢野 弘子	<b>昭和39年</b> 安達 昭郎 遠藤 脩造 尾崎 武二 梶原 康敬 金沢 成光 倉形 邦英 黒木 妙子 佐久間恒和	<b>昭和40年</b> 磯基道 伊藤 和雄 伊藤 晃 畦元直三郎 小口敏太郎 風間 匡英 神本 慶助 杉浦 銀蔵 浜田 勝伸 麓 大三
<b>昭和20年</b> 磯 基道 伊藤 和雄 伊藤 晃 畦元直三郎 小口敏太郎 風間 匡英 神本 慶助 杉浦 銀蔵 浜田 勝伸 麓 大三	<b>昭和28年</b> 石垣 恭弘 植竹 和也 木代 辰雄 栗田 吉男 桜井 裕 瀬戸 享 竹村 政一 田村 佐重 椿山 雄久	<b>昭和33年</b> 池田 忠良 笠間 三男 加藤 五郎 小林 國平 近藤練太郎 臼井 徹郎 寺島 賢治 古川 新一 松田 誠一	<b>昭和41年</b> 伊藤 道夫 工藤 富司 篠崎 清 渋谷 六郎 東海林 正 園田 勲 竹内 孟 竹原 晃 田中 保 田村 浩司 坪井 聰介 西田 金誉 野村 龜利 村松 勉 矢作 栄甫	<b>昭和42年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治
<b>昭和21年</b> 石川 幸一 杉山 忠次 中谷 宏 松本 健次	<b>昭和29年</b> 德永 静 新谷 勤 平田 佳邦 福島 敏郎 堀 武 牧 宏 牧野 迪正 三田 郁夫 宮尾 利政 村上 全司 山口 猛 吉川 和夫 渡邊 靖	<b>昭和34年</b> 池田 実 伊東 明男 岩瀬 善則 牛込 力夫 栗原 孝夫 佐藤 忠 高橋 秀雄 田尻 勝紀 玉置 憲三 児玉 五男 藤森 信正 宮 道夫 茂出木久義 横倉 隆康 吉川 和男	<b>昭和43年</b> 伊藤 道夫 工藤 富司 篠崎 清 渋谷 六郎 東海林 正 園田 勲 竹内 孟 竹原 晃 田中 保 田村 浩司 坪井 聰介 西田 金誉 野村 龜利 村松 勉 矢作 栄甫	<b>昭和44年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治
<b>昭和22年</b> 稲垣 義雄 大森 威男 小林 利孝 曾根 博 廣田 博 増淵 昭敏 三川 清治 森山 晶生	<b>昭和30年</b> 浅川 和昭 石井 喜悦 井上 秀雄 大内 蕃 尾崎 実 加藤浩一郎 瀧谷 俊雄 谷川 清 中嶋 貞夫 長山 勝政 奈良 富雄 村松 俊作 米田 虎雄 米山 廣保	<b>昭和35年</b> 安達 昭郎 遠藤 脩造 尾崎 武二 梶原 康敬 金沢 成光 倉形 邦英 黒木 妙子 佐久間恒和	<b>昭和45年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治	<b>昭和46年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治
<b>昭和23年</b> 伊東 達郎	<b>昭和31年</b> 飯沼 崇 川口 國夫 小池 久則 小松原 彬 高木 弦 田中 康博 田畑 調友 中 嘉久 廣橋 亮 村山 政敏 本山 方史 役重 典之 安田 信人 矢野 弘子	<b>昭和40年</b> 伊藤 道夫 工藤 富司 篠崎 清 渋谷 六郎 東海林 正 園田 勲 竹内 孟 竹原 晃 田中 保 田村 浩司 坪井 聰介 西田 金誉 野村 龜利 村松 勉 矢作 栄甫	<b>昭和47年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治	<b>昭和48年</b> 天野 章 稲見 和男 樫村 正久 佐藤 六郎 松田 稔 和田守哲治

石岡 龍右 倉澤 守雄 長田 守一 津崎 信隆 田村 英雄 土屋 宏一 望月 栄一 茂出木義雄	清水博太郎 高間 伸一 竹森 徹 丹野 隆善 西脇 鉄雄 幡野 匡彦 三谷 治郎 向井 常雄	加村 尚喜 小林 満 滝戸 俊夫 田中 碩 土田 久 永島 一男 宮内 和司 山田 達雄	杉山 文敏 鈴木 昌三 谷藤 善美 諸原 浩 富田 弘子 森 弘通 松島 浩	村原 伸 加來 洋子 宮崎 裕子 吉野 徹
<b>昭和38年</b> 生駒 二郎 稲垣 甫 井野 二陸 岩本 恒夫 大石 哲 栗田 公夫 酒井 誠一 白石 益郎 鈴木 忠 竹内 栄多 中澤 隆夫 長嶋 潜 永田 正巳 西山 孝彦 藤野 裕	<b>昭和41年</b> 相見 光郎 石原 祥江 今村 晃一 上林 直也 楠 勝行 重田 勲次 嶋田 晋廣 高桑 豊 館 敏夫 白竜美津夫 平井 栄司 藤池 誠治 真下 清 丸山 武紀 村井 直樹 安江 任 矢野 鎮雄 芳崎弘一郎	<b>昭和46年</b> 齊藤 政久 三瓶 辰一 島津 学 三宅 久利 <b>昭和47年</b> 齊藤 菊夫 森 伸一 <b>昭和48年</b> 秋久 俊久 加來 文隆 川津 義人 坂口 信昭 櫻川 昭雄 関口 優紀 渡辺 明典 <b>昭和49年</b> 小島 元昭 佐藤 哲 澤口 孝志 嶋村 典和	<b>昭和55年</b> 江田 久雄 中村 宏昭 <b>昭和56年</b> 飯田 隆久 伊藤 和宏 岩崎 好高 前川 雅昭 前山龍一郎 <b>昭和57年</b> 小高 真弓 観音寺信夫 清水 繁 <b>昭和58年</b> 酒井 一徳 鈴木 義弘 <b>昭和59年</b> 磯崎 勉 小嶋 芳行 高間 幸夫 萩原 俊紀 福元 俊之 <b>昭和60年</b> 勝又 雅子 加藤慎次郎 栗田 直人 塚田 雅人 <b>昭和61年</b> 石井 睦子 中西 剛 三井 宏 森田 孝節 <b>昭和62年</b> 磯崎 誠也 黒田美和子 栗田 雅子 曾田 直喜 <b>昭和63年</b> 石川 恵子 小川 誠 野出 勝美 橋本 徳子 福原 信一 吉野 早苗 <b>昭和64年</b> 浅野 祥司 阿部 健弘 榎本 充男 大野 正博 小笠原幸道	<b>平成4年</b> 石黒 香織 佐藤 順一 高橋 健児 遠山 岳史 <b>平成6年</b> 岡田 賢識 谷合 哲行 <b>平成7年</b> 浮谷 基彦 辻見 佳恵 林 秀憲 <b>平成9年</b> 伊掛 浩輝 蔵並 潤一 細田 武文 <b>平成10年</b> 松田 弘幸 <b>平成11年</b> 伊藤 徳高 <b>平成12年</b> 小島 正浩 長谷川雄二 藤田 尚之 山田 剛也 <b>平成13年</b> 佐々木俊介 谷川 俊晶 鳴瀧 紘一 吉川 賢治 <b>平成14年</b> 上原 愛花 根木 隆之 日野 隆 藤田 泰 山根麻衣子 <b>平成15年</b> 伊東 繁 伊藤 秀憲 熊谷 彬 瀧澤 慶子 田代 哲也 最上 尚行 <b>平成16年</b> 小川 智美 後藤 裕幸 永松 寛喜 <b>平成17年</b> 青山 忠 以上490名
<b>昭和39年</b> 青木 匡 梅原 達朗 仁 轟 亀村 隆 小屋原英雄 齐藤 守罔 齐藤 博之 嶋津万里子 鈴木 庸一 瀬尾 直朝 高松 武生 竹石 肇 武田 幸久 田原 恭一 寺山 洋子 徳永喜八郎 中野 洪 野尻 義雄 藤池 曠子 堀 是治 松村政之輔 矢野彰一郎 遊佐 勝見 和田 高伸 渡辺 久和 渡辺 進作	<b>昭和42年</b> 稲川 栄一 大川 清宏 古阪 一昭 佐藤 馨 栃木 勝己 富田 潤一 能代田順久 橋本 廣雄 山崎 博 <b>昭和43年</b> 浅井 保雄 新井 浩一 海上 幸三 佐藤 精二 進藤 宣詔 松村 清利 山梨 乾一 <b>昭和44年</b> 石山 利男 大川 洋 関口 信夫 八幡 順一 花井 秀之 渡辺 光仁 <b>昭和45年</b> 大木 実 柿澤 修	<b>昭和50年</b> 上田 賢二 上條 治夫 関口 真理 鶴田 正之 長井 一良 細谷 博邦 <b>昭和51年</b> 梶 公一 <b>昭和52年</b> 井上 久 土岐 正史 深澤 豊史 <b>昭和53年</b> 荒川 昇 植松 一郎 原田 茂 深津 誠 福田 一直 吉田 光夫 <b>昭和54年</b> 浅野 祥司 阿部 健弘 榎本 充男 大野 正博 小笠原幸道	<b>昭和65年</b> 飯田 隆久 伊藤 和宏 岩崎 好高 前川 雅昭 前山龍一郎 <b>昭和66年</b> 小高 真弓 観音寺信夫 清水 繁 <b>昭和67年</b> 酒井 一徳 鈴木 義弘 <b>昭和68年</b> 磯崎 勉 小嶋 芳行 高間 幸夫 萩原 俊紀 福元 俊之 <b>昭和69年</b> 勝又 雅子 加藤慎次郎 栗田 直人 塚田 雅人 <b>昭和70年</b> 石井 睦子 中西 剛 三井 宏 森田 孝節 <b>昭和71年</b> 磯崎 誠也 黒田美和子 栗田 雅子 曾田 直喜 <b>昭和72年</b> 石川 恵子 小川 誠 野出 勝美 橋本 徳子 福原 信一 吉野 早苗 <b>昭和73年</b> 浅野 祥司 阿部 健弘 榎本 充男 大野 正博 小笠原幸道	<b>平成18年</b> 伊藤 徳高 小島 正浩 長谷川雄二 藤田 尚之 山田 剛也 佐々木俊介 谷川 俊晶 鳴瀧 紘一 吉川 賢治 上原 愛花 根木 隆之 日野 隆 藤田 泰 山根麻衣子 伊東 繁 伊藤 秀憲 熊谷 彬 瀧澤 慶子 田代 哲也 最上 尚行 小川 智美 後藤 裕幸 永松 寛喜 青山 忠 以上490名

## 編集後記

工化時報第22号は少子化問題をテーマに作成してみました。いかがでしたでしょうか？工化時報編集委員会では、毎年7月第1週に編集会議を開催してその年の誌面の打ち合わせをしております。工化時報にこんなことを書いてほしい、ご要望、ご提案などがございましたら下記にご連絡いただければ幸いです。また、過去の工化時報(19号以降)をホームページ上からも見られるようにしております。ぜひご覧ください。



<ホームページ>

<http://www.chem.cst.nihon-u.ac.jp/index.html>

## お知らせ

### 平成18年度の行事予定

- 5/20(土) 工化会総会
- 7/15(土) 一日体験化学教室
- 7/30(日) オープンキャンパス

### 連絡先

- ・工化会及び会費に関する問合せ→庶務(安江 TEL:03-3259-0797)
- ・住所変更に関する問合せ→会員(櫻川 TEL:03-3259-0802)
- ・工化時報に関する問合せ→会報(澤口 TEL:03-3259-0819, FAX:03-3293-7572, E-mail:jihou@chem.cst.nihon-u.ac.jp)

## 広告募集

工化時報では会社広告及びクラス会・同窓会報告を募集しています。掲載の詳細につきましては会報委員会までお問い合わせください。

掲載料 1件 : 10,000円

## 発行所

東京都千代田区神田駿河台1-8  
日本大学理工学部工化会会報委員会

◎伊藤和雄, 永島一男, 小川 誠, 橋本徳子, 石黒香織,  
澤口孝志, 谷川 実, 遠山岳史, 平野勝巳, 森田孝節

### 学生編集委員

- M2 八巻志帆
- M1 海東淳子, 小菅将彦
- 4年 井上洋明, 上原麻美, 小倉洋介, 加藤里香, 柴田洋一郎,  
廣瀬達也, 富樫恭輔, 三浦義之
- 3年 珍田愛子, 中川友希, 名取美菜子
- 2年 須賀 徹, 武山絵梨子, 宮原潤一